

編集後記

『フェンスレス』創刊号が完成した。創刊号は「特集●貴司山治と〈占領・開拓〉の時代」として特集論文四本・インタビュー一本、一般論文二本、レビュー二本、そして資料として柳瀬正夢の「満洲日記」の翻刻を掲載している。胡麻の中澤昌平さんは、畑仕事の繁忙期にのんきに出かけていった私たちに快くお話し下さった。高原での至福のひとつだった。

なお、小誌オンライン版では、資料として雑誌目次総覧『プロレタリア文学（白揚社版）』『進歩』『エクリバン』も掲載する。いずれも占領開拓期文化研究会会員の研究成果である。

占領開拓期文化研究会は、二〇一〇年六月に発足した。直接のきっかけは、「立命館大学国際言語文化研究所萌芽的プロジェクト研究」への応募である。二〇一二年度まで採択され、支援を受けた。その間、研究代表は内藤直由、友田義行、村田裕和と交代しつつ、

立命館大学を中心に、京都大学、同志社大学の院生・ポスドク・若手教員や、海外の研究者が参加し、年四回の研究会を続けてきた。

それらの研究成果の一部は、すでに『立命館言語文化研究』（第二三巻三号、二〇一二年二月発行）に特集「〈占領と開拓〉の問題系」（内藤由直編）として掲載されており、研究所ホームページでも公開されている。さらに、研究会情報などはブログ「占領開拓期文化研究会」(<http://senryokaitakukibunka.blog.fc2.com>)で随時発信してきた。

本誌『フェンスレス』は、研究会のこの三年間の歩みの中で、研究活動の場を一段と開かれたものとし、みずからのメディアによって発信したいという会員たちの強い思いによって企画された。しかしこれは国際言語文化研究所の強いバックアップなしには実現しなかった。研究所の諸先生および事務局スタッフの皆様にはたいへんお世話になった。前所長 Charles Fox 先生、現所長崎山政毅先生から頂戴したご高配には並々ならぬものがある。この場をお借りして心よりお礼申し上げます。多くの研究プロジェクトを抱え、相

互に緩やかなつながりを持ちつつ、自由な研究活動を保障する研究所の伝統を受け継いでいきたい。

今号の特集で貴司山治というけっして著名ではないプロレタリア作家を取り上げたのは理由がある。占領開拓期文化研究会のメンバーの多くは、二〇一一年一月に不二出版から刊行された『貴司山治全日記DVD版』およびその別冊『貴司山治研究』にスタッフあるいは解説・解題執筆者としてかかわった。その編集母体である「貴司山治研究会」が立命館大学文学部の中川成美教授によって設立されたのは、二〇〇七年のことであった。その元をたどれば、中川教授と貴司山治ご長男・伊藤純氏との出会いということになるが、それより遙か以前に、教授の元で貴司山治を研究対象とした秦功一氏が伊藤氏のお世話になったという経緯もあった。二〇〇〇年頃のことであると思う。中川先生、伊藤氏をはじめ、解説執筆の浦西和彦、森久男、鳥羽耕史、安岡健一各氏にも多々ご教示賜った。ここにあらためて感謝申し上げたい。（同研究会について詳しくは中川成美「文学者・貴司山治

とプロレタリア文学」（『貴司山治研究』所収）を参照されたい。）

貴司山治研究会は『全日記』刊行を前に研究会活動は終了し、編集作業に注力することとなった。編集作業の見通しが付くと、内藤・友田・村田の三名は、貴司山治もふくめつつ、より広いテーマでの研究会の設置について相談し、前記のプロジェクト研究に応募したというわけである。したがって、貴司山治との出会いなくして、研究会は始まらなかったし、雑誌創刊にあたって貴司山治に関する特集を組もうと考えたのは自然の成り行きであった。今回は、はからずも一九四〇年代前半の貴司山治に焦点を当てる特集となった。当時の貴司山治は、速記者を数名同時に抱え、複数の大衆小説を同時進行で口述していた。また、戦後には、新聞連載小説の配信事業にも大きく関与している。メディア論・コミュニケーション論・大衆文化論といった観点からの研究も必要であり、今後も継続的に関心を持ち続けたいと考えている。なお、『全日記』刊行後、貴司が戦後すぐに発刊した文学雑誌『東西』の解題・総目次・索引を本会

の和田崇氏が公開している（『立命館文学』六一八号、インターネット公開あり）。あわせて参照されたい。

研究会では多数の若手研究者が発表し、幹事持ち回り制を原則として活動を継続してきた。今回執筆が間に合わなかった原稿も多々ある。次号をお待ちいただきたい。本誌は当面、年一回の刊行を予定している。また、冊子体刊行後一ヶ月程度を目安にオンライン版を公開する。原則として掲載内容は同一であるが、オンライン版では、冊子体で掲載できなかった資料を附録として公開していきたいと考えている。小誌へのご批判とご支援をお願いしたい。

研究会に関心を持たれた方は、ぜひブログ「占領開拓期文化研究会」をのぞいていただきたい。最新の情報・連絡先はこちらで随時更新している。（M）

本誌の図版掲載等において下記の方々・機関のお世話になった。感謝申し上げます。

青木澄夫

伊藤純（貴司山治・貴司悦子）

伊藤弘子（伊藤熹朔）

玉井良子（玉井徳太郎）

小樽文学館池田寿夫文庫

財団法人草月会

東京都現代美術館柳瀬正夢文庫

（敬称略）

本誌は、二〇一一年度立命館大学国際言語文化研究所萌芽的プロジェクト研究二〇一一年度立命館大学研究推進プログラム（若手研究）の助成を受けた。